



第426号 平成26年1月1日

発行所 京都市学校医会

京都市中京区間之町通竹屋町下ル

楠町601-1 こどもみらい館 2階

TEL (075) 256-0351

FAX (075) 241-3568

発行人 奥村正治

## 新春明けましておめでとうございます

会長 奥村正治

新春明けましておめでとうございます。本年も会員の皆様方よきお年をお迎えの事と存じます。

昨年は、ここ数年来の気象状況の変化で、京都が最悪の年を迎えた様です。北は福知山の水害、京都市内に於いても嵐山の水害、伏見の小栗栖地区の水害と水の事故がありました。被災されました会員の先生方、御見舞申し上げます。どうか本年は平穩無事である年を願います。

本年4月より、又、新しい学校が誕生いたします。新しいと言っても小規模校の合併で新しい誕生という事になります。場所は東山区の一橋小学校、月輪小学校、今熊野小学校が1つになり、月輪中学校を併せて東山泉（いずみ）小中学校として誕生いたします。東山区は先に誕生した開晴小中学校と白河総合支援学校分校を含めまして3校になります。支部としては総合支援学校は京都市全域の支援学校を合わせて支部形成となり、東山区としては2つの学校と言う事になります。4月より新しい支部としての誕生も出て来るかも知れません。

4月よりの学校検尿も新しい方式が取り入れられ、第二次検尿の尿沈査を中止し、尿蛋白／クレアチニン比を用いた形式で、尿検査の判定を行なうようになります。くわしくは、次号2月号で府医 学校検尿事業委員会の委員長 川勝秀一先生に解説をお願いしておりますのでご覧いただきたいと存じます。

昨年春に学校医のスポーツ医事班を復活し、20数

名の先生方が、名乗り出ていただきました。本年も、学校の関係するスポーツ大会はいくつかございます。昨年より、中学生の大会にも医師の救護班と言う事で教育委員会より出務依頼が出ております。ただ、中学生の大会は土曜日が多く、又、中には診療をなさっているウィークデーにもある様です。中学生の大会を休日ばかりに予定する事は授業等にかなり無理が出て来る様でございます。出務依頼はまず教育委員会より学校医会に一番にお知らせをいただく様、お願いいたしました。うまく先生方の診療の合間に合う様でしたら、ご参加いただきたいと存じます。

小学生の方は、大勢の出務を必要とする大文字駅伝は出場参加校の校医さんにご協力をお願いいたしており、今のところかなりの先生方に手を上げていただいている現状です。感謝でございます。来月、大会がございます。どうぞよろしく願い申し上げます。あと、陸上競技会、持久走記録会等々もございます。スポーツ医事班の先生方にお声かけいたしますので、こちらの方もどうぞよろしく願い申し上げます。

毎年の事ですが、お願い事ばかりで申しわけございません。

本年も会員の先生方皆様によき年であります事を祈念し、新年のご挨拶といたします。

## 新年のご挨拶

京都府耳鼻咽喉科専門医会会長 豊田 弥八郎

皆様、今年もお健やかに新しい年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

昨年は、京都府においても台風18号による水害など今まであまり経験したことのなかった規模の自然災害が発生し、二酸化炭素排出の世界的な増加による地球温暖化が原因ではないかといわれます。日本の国土が温暖なアジアモンスーン気候帯から、まるで亜熱帯気候帯へと変異しつつあるようです。この自然環境変化には二酸化炭素の増加、とりわけ化石燃料消費の増大があずかっているとの議論から、クリーンなエネルギーを求めて原子力エネルギーへの転換が必須であるかのごとく叫ばれてきました。それも福島第一原子力発電所の甚大な事故を受けて、原子力エネルギーがクリーンなどころか人類を放射能被害の危機へいざなう最も危険なエネルギー源で

あるとされ、新たなクリーンな代替エネルギー源の模索が続いています。このような社会の転換期を迎え、子供たちの永続的な健康維持への取り組みも今一度見直すことも必要であるかもしれません。終戦後の社会の不衛生な状態による疾病構造に照準を合わせた学校保健法による学校健診の在り方も、現代社会のニーズに合った形へと変化していかなければならない時期が来ているのではないかと考えております。耳鼻咽喉科健診においても感染症の早期発見からアレルギー疾患、感覚器異常の検出に主眼を置いた検診へと変化して行くべき時ではないかと思えます。微力ですが今年も子供たちの健康のための専門医活動が続けていきたいと思えます。よろしくご支援のほどお願い申し上げます。

---

## 新年のご挨拶

京都府眼科医会会長 佐々本 研 二

新年あけましておめでとうございます。昨年は記録的な厳しい暑さ、かつてなかったような集中豪雨など気候変動の大きさを実感させられました。福島原発事故の汚染水問題も解決のめどが立たず、安心して住むことのできる国を次世代に残すことができるのか、現在の生活、子どもたちを取り巻く環境を見直す必要に迫られているのではないのでしょうか。

子どもたちの近視の低年齢化は留まるところを知りません。ハンディタイプのゲーム機だけでなく、スマートフォンも子どもたちの手の届くところにあります。学校現場でもパソコンを使っての学習が急速に拡大してきています。低年齢で発症した近視は成長とともに進行して強度の近視となり、成人以後に網膜剥離や緑内障、さらには加齢黄斑変性など、失明に至る病気を生じやすくなります。情報技術の発達が著しい現代社会にあって子どもたちの近視を予防することはむずかしいと思えますが、少なくとも強度の近視、病的近視にならないように環境を整

える必要があるのではないのでしょうか。

また、近視になった子どもたちの中にはお稽古事で眼鏡が掛けられないのでコンタクトレンズを希望する親もいますが、小学生ではコンタクトレンズを間違いなく取り扱うことはむずかしく、安全面からできれば使わせたくないものです。

話は変わりますが、最近女性たちの間で目を大きく見せるための化粧が流行っています。その中で昨年から急激にカラーコンタクトレンズがおしゃれ用として出回るようになりました。アクセサリと同じ雑貨品扱いで、海外の安価なレンズが眼科医の診察なしに買える状況が出来上がり、今や中高生にまで広まっています。コンタクトレンズの基礎知識もなく装用指導も受けていない人たちが安易な使い方をして角膜障害を起こしています。場合によっては感染症で角膜が混濁して視力障害を残す危険性もあり、非常に心配していますが、これも構造改革、規制緩和のなせる結果でしょうか。自己責任と言っ

てしまえばそれまでですが、ものが売れさえすればよいという風潮は何とかならないのでしょうか。少なくとも子どもたちには正確な知識を伝え、危険なレンズを使わないよう指導したいものです。

子どもたちへの健康教育によって、その知識が親たちにも伝わり、社会全体の健康に繋がることを願っています。

本年もよろしくお願い致します。

## 第44回全国学校保健・学校医大会 第3分科会 検診・運動器検診

学校医会副会長 林 鐘 声

健康教育のあり方として参考となるいくつかの取り組みが示されていた。

- 1, 東京都立学校における学校心臓検診の状況  
(都立高等学校・都立中等教育学校・都立中学校)  
東京都医師会 泉田 直己
- 2, 全県統一学校腎臓検診における緊急受診システムの現状と問題点 静岡県医師会 和田 尚弘
- 3, 姫路市における医師会と養護教諭との連絡会の取り組み 兵庫県医師会 岡 勝巳
- 4, 広島市安佐地区における「健康相談教室」事業の報告 広島県医師会 松本 治之
- 5, 広島県県立学校における学校医に関するアンケート調査の報告 広島県医師会 渡邊 弘司
- 6, 徳島県における小学生サッカー選手の障害の実態 ～メディカルチェックの結果より～  
徳島県医師会 鈴江 直人
- 7, 豊島区立中学校における骨密度測定事業について—第2報— 東京都医師会 猪狩 和子
- 8, 平成24年度「学校保健課題解決支援事業」  
埼玉県における学校での運動器検診について  
埼玉県医師会 柴田 輝明

1：東京都医師会の都立学校心臓検診判定委員会が中核となって実施した最近5年間の結果報告であった。心電図・問診票・校医の診察からなる一次検診で7.8%の生徒を抽出。判定委員会が、その対象者を1.7%に絞り込んで、心エコー、運動負荷心電図などを行う二次検診・精密検診へ進んでいた。京都府では検診委員(90%)、あるいは校医(10%)が直接に学校へ出向き、対象者を1/3に絞り込んで、三次検診は3.3%~3.5%となっている。医師が学校へ出向き、学校現場の情報を把握し、生徒を直接に指導できる体制となっている京

都方式は全国でも稀かつ有用な検診システムと再認識した。

- 2：尿蛋白(4+)、尿糖(3+)のどちらかの陽性者には、教育委員会を通じて学校から本人に至急の受診勧告書が手渡されることで始まる緊急受診システムが、全県統一して今年度から実施となった。至急精検者は1万人当たり0.3人であった。2/3は尿糖を理由とするもので、重篤な腎疾患の発見より糖尿病の発見が多かったようである。初年度は、緊急受診システムならではの効果をみた症例発見はなかったものの、その評価は今後のことになる。
- 3：過去6年間、夏休みに全体会合を開催し、水イボの処置やプールでのゴーグル装着の可否などの学校保健に関する諸問題の意見統一を図り、それをもとにQ&A集を作成してきた。それによって、校医と養護教諭との間での意思疎通は満足すべきものとなってきており、次は校長の理解を得られるようにしたいということであった。京都市では、年1回、教育委員会、校園長、養護教諭との間で各々代表者会議を持ち、その内容については逐次、校医ニュースで周知している。関係者とのコミュニケーションのとり方は様々である。
- 4：宇佐学校保健会の主催で、昭和54年以来、年1回、現在は3会場に分かれて、健康相談教室を開催してきた。相談件数は歯科、内科、心の相談、整形外科、皮膚科、耳鼻科、眼科の順に多い。歯科でいうと、歯並びが悪い、矯正治療の要否などといった主治医には相談しにくい内容が多かったということである。他科についても同様で、いわゆるセカンドオピニオンを求める相談も20~40%を占めるとの事であった。父兄に対する健康相談の1つの形ではあるが、相談内容が資料として残っ

ていることが素晴らしかった。

- 5：学校からの一本釣りで校医が決まっているのは約50%ということであった。校医が就任時にその契約内容の説明を受けていたのは僅かに1/3で、残りの多くは書類送付のみの対応となっていた。校医がトラブルに遭遇した時には、校医1人での対応を強いられることが指摘されていた。京都市とは事情が異なることではあるが、京都府ということになると、広島県と特に変わるところはなく、府医の学校医部会の課題でもあるとして拝聴した。
- 6：平成24年度の徳島県の全サッカー少年団チームが出場する大会に参加した全選手に対するメディカルチェックの結果報告であった。全113チームに予めアンケートを送り、回収できたのは97チーム(83.8%)、個人回収数は1162であった。そこから一次検診者を抽出し、大会中に77チーム、494名に検診を実施した。うち394名(79.8%)が要二次検診者として医療機関の受診が必要と判定されたが、実際に受診したのは106名に過ぎなかった。障害を抱えながら運動している選手が多いなかで、検診をしても事後処置にうまくつながらないのは、大文字駅伝選手の整形外科検診でも同様

である。とはいえ、運動器に障害を持つ学校の運動クラブ員の実態把握が不十分な現状からすると、検診の実施は必須である。将来の運動に影響がでる重篤な障害の早期発見、早期治療につながるものとして、学校での運動器検診がその役割を果たすよう求められてくるのではないかと思った。

- 7：豊島区学校保健会の検診事業。超音波骨量測定装置による踵での測定結果を生徒・保護者に戻し、食育指導に活かすことを目的とした検診であった。思春期に骨量が増えることから、思春期に骨密度を高めることがポイントと指導していた。測定結果は数値で出てくること、経年的測定結果を示すことが出来ることから、本人・保護者に理解が及び易い検診となっている。健康教育の実践例として興味をひく発表であった。
- 8：6は運動過多に伴う障害をターゲットにしていたのに対し、運動をしない子たちにみられる体が硬い、バランス力の低下といった運動機能不全に注目したものである。けが、傷害の予防と適切な運動習慣は必要であるが、そのための第1歩として運動器検診の果たす役割が大きいとする埼玉県鴻巣市からの発表であった。

## 第44回全国学校保健・学校医大会に参加して 第4分科会

平成25年11月9日土曜日、秋田県において日本医師会主催、秋田県医師会の担当で第44回全国学校保健・学校医大会がおこなわれた。

私は第4分科会の耳鼻咽喉科に参加したので報告します。

座長は日本耳鼻咽喉科学会秋田県地方部会長、石川和夫先生と同幹事の桃生勝巳先生が務められました。

秋田キャッスルホテル内の会場には数十名が参加して発表、質疑応答が活発に行われた。

発表された演題は以下の9演題でした。

- 1 学校健診で発見された聴覚障害  
秋田県医師会 中澤 操
- 2 就学児童の「きこえ」と「ことば」の関わり  
奈良県医師会 川本 浩康
- 3 横浜市における耳鼻咽喉科救急疾患の救急処置・

耳鼻咽喉科専門医会理事 鈴木 由一

- 対応の現状 神奈川県医師会 朝比奈紀彦
  - 4 バイリンガル教育が一因と考えられた言語発達遅滞例 徳島県医師会 宇高 二良
  - 5 聴覚特別支援学校における聴覚過敏についてのアンケート調査 大阪府医師会 西村 将人
  - 6 福島県における聞こえに課題のある児童生徒の実態調査 福島県医師会 馬場 陽子
  - 7 小児心因性難聴の動向  
兵庫県医師会 阪本 浩一
  - 8 肢体不自由児特別支援学校における耳鼻咽喉科学校健診での摂食嚥下問診票の活用について  
秋田県医師会 中澤 操
  - 9 宮城県における耳鼻咽喉科健診の現状  
宮城県医師会 熊谷 重城
- なお当日の抄録は医師会専門医会事務局にありますので興味のある先生はご覧下さい。